

『蝦夷語箋』の研究

成田修一

1. はじめに

『蝦夷語箋』は、嘉永七（一八五四）年刊の日本語アイヌ語対訳意義分類体の語彙集である。

この語彙集に関しては、早くに金田一京助により次のような紹介がある。少し長くなるが、以下に必要な個所を引用する。¹⁾

然るに藻汐草と並んで世に蝦夷語箋という刊本の蝦夷語の語彙がある。この二つは幕末に出た唯二つの刊本の蝦夷語書で、注目すべきものである。藻汐草は横本であるが、語箋の方は縦に長い小形の一冊本で、版も全くちがいで時代も稍々下つて「嘉永七甲寅年仲夏新刻豊雲楼蔵版」である。著者は名前がなくなつてたが上原先生著と見返しの標題の右肩に見えているだけである。

内容を見ると、目次から既に藻汐草と一言一字の相違なく（仮名を振つてあるだけが相違）本文に至つても抄録と見るべき外何等の相違も発見しない。尤も處々藻汐草の版の不明な箇所を語箋の方では誤読をして外の字に変つていたりなどとはある。（中略）滑稽なのは藻汐草に（七丁才）

冽 ラツカ

とある。此の冽字は水の清い意味澄む意味の字でラツカはアイヌでやはり澄むことであるから、正しくあたっているのを、冽字を見損って洲と思つたので語箋には(三丁オ)行書の冽ともつかず洲ともつかぬ文字を書き「す」と仮名を振っている。洲はオタ若しくはオタカであるから此は全然合わない。(中略)

今一つ重大なことは、藻汐草の新工夫のツという文字は一つ残らず語箋にツとなっている。これでは、最初の苦心も水の泡どころか、却つて大きな齟齬となつた。その位ならやはりトとしておく方が遙かに近かつたのである。

これに由つて思うに蝦夷語箋は決して藻汐草と材料を異にする別種の書ではなく藻汐草を種として作り替えたものである。嘉永の頃になると、世間には外国語学の知識が須要となつて蘭語箋・蛮語箋・英語箋・露語箋など語箋類が續々出版されて来た。何れも同一形の小形の縦本である。この氣運に迎合して、同じ形で以て、蝦夷語箋を出すようになったものであろう。その為に藻汐草の詳密な訳語、例えば雨という一語にもアプト。ルアンベ。ベニ。ウエニ^(ウ)。など数語の類語を挙げたのを、最初の一語アプトだけを挙げるといふような鈔録をして、其の序でに順序を二三体裁よく置き替えなどし、(中略) 刊行したものらしい。

以上の金田一の記述から、『蝦夷語箋』(以下『語箋』と記す)には「藻汐草と一言一字の相違なく本文に至つても抄録と見るべき外何等の相違も発見しない」「一つ残らず語箋にツとなっている。これでは、最初の苦心も水の泡どころか、却つて大きな齟齬となつた」といつた指摘がされたこともあり、これまで『語箋』については詳しく研究がされてこなかつた。

本稿ではこの金田一の記述をふまえ、『藻汐草』との比較において『語箋』の、特に表記について述べるものである。

2. 『蝦夷語箋』の書誌

『語箋』には、嘉永七年版⁽²⁾と明治四年版がある。

嘉永七年版は木版本で、縦約一九cm、横一〇cmの縦長本。外題は「蝦夷語箋 全」、内題は「上原先生著 蝦夷語箋 豊雲楼上梓」とある。一オウ二オに「目録」(天地部・人物部・支体部・世事部・口鼻耳目心・器財部・鳥獸部・草木部・品目・助辞・熟語)、二ウ・三オに「蝦夷地図」、三ウに「東西蝦夷人男女之図」を載せる。次に、四丁にわたり(一オウ四ウ)「附録魯西亜言語」(天地・服食・器財・肢体・人倫・言辞・気形・文字)がある。そして、一オウ四一ウに「蝦夷語箋」として、「天地之部く和歌を蝦夷言葉に訳す」までを載せる。奥付は「嘉永七甲寅年仲夏新刻 豊雲楼蔵版」とある。全四八丁。

一方、明治四年版は木版本で、縦約一九cm、横約一一cmの縦長本。外題は「蝦夷語箋 大全」、内題は「安政甲寅新刻 蝦夷語箋 全 東京 文苑閣発行」とある。最初の四丁にわたり(一オウ四ウ)「附録魯西亜言語」があり、次いで一オウに「目録」(天地く草木部)がある。そして、一オウ四一ウに「蝦夷語箋」がある。奥付は「明治四辛未歳求板 東京書林 日本橋通十軒店 鈴木喜右衛門」とある。全四五丁。明治四年版には、「蝦夷地図」と「蝦夷人男女之図」が省略されている。

本稿では、金田一が参考とした嘉永七年版(架蔵本)を使って記述する。

3. 『藻汐草』について

『藻汐草』は金田一の指摘^③にあるように、一冊本と二冊本があることが知られているが、一冊本には内容によって、甲乙の二種があることが指摘されている。^④『語箋』を検証してみる。

『藻汐草』

甲 赤く染る (二五ウ) フーレカ
乙 赤く染る フーレカ

『語箋』

赤く染る (二四オ) フーレカ

甲 互いに得心 (二八オ) アンラムヲチユウエ
乙 互いに得心 アンラムヲチユウエ

互に得心 (二五ウ) アンラムヲチユウエ

甲 入れてしまふ (三〇ウ) ヲマレアノキタ
乙 入れてしまふ

入れて仕まふ (一七オ) ヲマレアノキタ

(埋木)

このことから、『藻汐草』の甲本を写したことが判る。

4. 日本語の見出し語について

『藻汐草』^⑤と『語箋』の分類毎の日本語見出し語数は次のとおりである。^⑥

	『藻汐草』	『語箋』
天地	二二三	二二一
人物	一〇七	一〇四
支体	一三八	一三七
世事	四五七	四二六
口鼻耳目心	一四八	一三一
器財	二三五	二〇五
鳥獸	二〇七	一八六
草木	一七一	一四〇
品目	一四八	一四三
助辞	一一三	九七
計	一九四七	一七八〇

金田一には「本文に至つても抄録と見るべき外何等の相違も発見しない」とあるが、日本語の見出し語形に違いが見られる。送りがな、漢字、仮名、読み、活用形等である（『語箋』は日本語の見出し語及び片仮名表記のアイヌ語に各々振り仮名があるが、特別な場合を除き省略した。以下同じ）。

『藻汐草』

『語箋』

遠い (四才)

遠ひ (二ウ)

川端た (四才)

川端 (二才)

濱より出し風 (六才)

濱より出る風 (二ウ)

樹の茂生 (七才)

樹の生茂 (三才)

蝦夷地上古の人 (二二才)

ゑぞ地上古人 (六才)

母の母 (一三ウ)

母のはゝ (七才)

癒ゆる (一八ウ)

癒 (一〇才)

若ひ (一九才)

若し (一〇ウ)

幼い (一九才)

幼し (二〇ウ)

交ゆる (二三才)

交える (一二ウ)

ふるまい (二四ウ)

振舞 (二三ウ)

入れ墨文身 (二五才)

文身 (一四才)

椀 (六二才)

椀 (三二才)

なお、「順序を二三体裁よく置き替へなどし」とと金田一が指摘しているが、この指摘は正しい。

『藻汐草』

『語箋』

貴人―諸侯―神靈―平人 (二一才)

貴人―諸侯―平人―神靈 (五ウ)

頤―頬―鼻 (一五ウ)

頤―鼻 (八才)

となっており、「頬」は『藻汐草』の「胸―肩―頭」(一六ウ)のところに該

当する『語箋』「胸―肩―頬―頭」(八ウ)に記載されている。

5. アイヌ語について

『藻汐草』と『語箋』の分類毎のアイヌ語数は次のとおりである(子見出しのアイヌ語を含む)。

	『藻汐草』	『語箋』
天地	三〇七	二二五
人物	一四一	一〇六
支体	一八四	一三九
世事	五七六	四三〇
口鼻耳目心	二〇四	一三二
器財	三三〇	二二一
鳥獸	三九四	一九三
草木	二六二	一四三
品目	一九六	一四二
助辞	一三九	九六
計	二七三三	一八〇七

江戸時代のアイヌ語の資料全般に見られることであるが、アイヌ語の片仮名表記において、エ・オをエ・ヲ、ネを子と表記されている。

この江戸時代のアイヌ語の表記を考える場合、日本語には普通ない音である ɛ の表記があげられる。当時の記録者も様々な工夫をしてきた。^①

(1) ツの表記について

金田一は「今一つ重大なことは、藻汐草の新工夫のツといふ文字は一つ残らず語箋にツとなっている」と指摘する。しかし、この「ツ」は、『語箋』にも記述されており、また、「ツ」「ズ」等の表記も見られる。

因みに、『藻汐草』で「ツ」の表記がされている例（熟語部を除く）は、

天地	一三
人物	四
支体	一〇
世事	三四
口鼻耳目心	五
器財	一七
鳥獸	二五
草木	一三
品目	一二
助辞	一
計	一三四

である。

①『語箋』でそのまま「ヅ」と表記されている例（四九例）

『藻汐草』

『語箋』

鼻（一五ウ）エヅー

鼻（八オ）エヅー

退く（二三ウ）イツク

退く（一三オ）イツク

張る（二六オ）ヅリ

張る（一四オ）ヅリ

止む（三〇オ）シユヅヅイ

止む（一六ウ）シユヅヅイ

呪詛（三六ウ）ヅシユ

呪詛（二〇オ）ヅシユ

鯉（五二ウ）ツモトヅヲン

鯉（二八オ）ツモトヅヲン

虎杖（六五ウ）シツクヅ

虎杖（三三オ）シツクヅ

色（七〇オ）ツム

色（三四オ）ツム

等

②金田一が指摘するように「ヅ」と表記されている例（二二例）

『藻汐草』

『語箋』

海（三ウ）アヅイ

海（二ウ）アヅイ

崎（三ウ）シリイヅ

崎（二ウ）シリイヅ

境（四ウ）シリウクヅル

境（二オ）シリウクヅル

岩山（六ウ）グヅン子

岩山（三オ）グヅン子

交ゆる（二三オ）ウヅマシ

交える（一二ウ）ウヅマシ

盃（四五オ）ヅーキ

盃（二四オ）ヅーキ

綱（四五オ）ヅシ

綱（二四オ）ヅシ

姥百合 (六六オ) ツレプ

姥百合 (三三オ) ツレプ

等

③ 「ツ」と表記されている例 (二〇例)

『藻汐草』

『語箋』

坂 (五オ) シリコツル

坂 (二オ) シリコツル

近所 (一〇ウ) ツタン

近所 (五ウ) ツタン

伯父 (一二ウ) ケウシユツ

伯父 (六ウ) ケウシユツ

脊 (一五ウ) セツル

脊 (八ウ) セツル

らう竹 (四六ウ) キセリツマム

らう竹 (二五オ) キセリツマム

つれ鴨 (五八オ) ツラ

つれ鴨 (三〇オ) ツラ

等

④ 「ズ」と表記されている例 (一例)

『藻汐草』

『語箋』

具足の小手 (四七オ) タンヅンベ

小手 (二五ウ) タンズンベ

⑤ 読み誤っている例 (ツ↓プ) (二例)

『藻汐草』

『語箋』

日月 (三オ) チユヅカモイ

日月 (一オ) チユプカモイ

脂 (六四オ) ウングツク

脂 (三二ウ) ウングプク

以上、ツについてその表記例を指摘したが、読み誤りを別として、書き換えの基準は不明である。

なお、『藻汐草』では記されているが、『語箋』で記載 (語形全体が) がない例がある。これは、『語箋』では多くが一語

目を採録しているためで、二語目以降の語が省略となつてゐるからである。また、全ての日本語見出しを採録していないことにもよる。(四〇例)

『藻汐草』

肝(一七オ)ファイベ▲ポペツク

合ハす(二九ウ)イウコ▲イウツタンバ

演舌(三六ウ)ヤイラプ▲マヅク▲ドウ

的(四四オ)ガン▲ヅカンクニフ

のびる(七四オ)リケン▲ヅク

透間(七八ウ)キルウケ▲ビルツル

また、『藻汐草』の語を読み誤つて『語箋』で「ヅ」と表記されている例がある。

『藻汐草』

踊る(二三ウ)タップカル

『語箋』

肝(九オ)ファイベ

項目自体がない

演舌(二〇ウ)ヤイラプ

的(二三ウ)ガン

のびる(三五ウ)リケン

透間(三八ウ)キルウケ

等

『語箋』

踊る(一三オ)タツカル

(2) 類語について

金田一は「藻汐草の詳密な訳語、例えば雨という一語にもアプト。ルアンベ。ベニ。ウエニ^{ウマ}。など数語の類語を挙げたのを、最初の一語アプトだけを挙げるといふような鈔録」があると指摘するが、一・二語目、二語目、三語目を採録している例が見られる。

『藻汐草』

『語箋』

〈一・二語目〉

吾(一二ウ)

ク▲クアニ▲カニ

吾(六ウ)ク・クアニ

汝(一二ウ)

イ▲イアニ▲ヤニ

汝(六ウ)イ・イアニ

〈二語目〉

うねり(四オ)

リヽ▲ムカン子リ

うねり(二ウ)ムカン子リ

岡(四ウ)

ヤ▲ヤタ

岡(二オ)ヤタ

跪く(二一ウ)

ニカリ▲クルムシカ

跪く(二一ウ)クルムシカ

行く(二四ウ)

アマン▲バイ

行く(二三ウ)バイ

〈三語目〉

泮(五オ)

メヅ▲メト▲子トー

泮(二ウ)子トー

妊娠(一九オ)

ヤイシウエンテ▲ホンコロ(レ)▲カツエ 妊娠(二〇オ)カツエ

また、『藻汐草』で「つなき 善知鳥 アチユイチカフ ワウヲ シヲルツ イヅラヒシカ」等、二十四のアイヌ語を列記しているが、『語箋』では「善知鳥の類二十四品」として、アイヌ語が省略されて表記している例もある。

以上、金田一の指摘に基づいて記したが、これ以外にいくつかアイヌ語の表記について指摘できる。

(3) 特殊文字について

『藻汐草』には「ヅ」以外にも、「ガ」「エ」「ゼ」と、いくつかの新字形の文字が見うけられるが、『語箋』ではそのまま

写している場合とそうでない場合に分かれる。

『藻汐草』

午(五ウ) ヒガタ

的(四四オ) ガン

哮ゆる(五一ウ) エーセ

水豹あざらし(五二オ) ツガリ

鰯(五六オ) ポンゼプ

蕨わらび(六五オ) セフマキナ

『語箋』

午(四ウ) ヒカク(但し、片仮名のアイヌ語への振り仮名は「ひかた」

となつていたので「ク」は「タ」の欠画か)

的(二ミウ) ガン

哮ゆる(二七ウ) エーセ

水豹(二七ウ) ツガリ

鰯(二九オ) ポンゼプ

項目なし

(4) アイヌ語の表記が異なっている場合

繰り返し記号であったり、語順の違い、読み誤り等。

『藻汐草』

人(一一オ) シシヤム

心得違ひ(三一オ) ウウエワツクノ

炙る(二六ウ) マー▲イマ

待遠しい(三四ウ) ヲタンゝカ▲ヤイシヤカンケ

箭の先(四四オ) マカニツテ

燕の如くにして眉毛長くたれる(五九ウ)

『語箋』

人(五ウ) シシヤム

心得違ひ(一七ウ) ウゝエワツクノ

炙る(一四ウ) マア

待遠しひ(一九オ) イヤシヤカンケ

箭ノ先(二三ウ) アカニツテ

フレツシヤムチリ 燕の如くにして眉毛たれたる鳥(三〇オ) アレツシヤムチリ

(5) 地域表記

『藻汐草』ではカラフト嶋、ソーヤ辺、メナシ山中、ウルツフ嶋、シヤリ、西地、東地など、二三項目に地域表示がある。そのうち『語箋』で地域表示があるのは、四例だけである。表示がないのは、単純に地域名がない、一語目を採録したため二語目以降は省略、日本語見出し項目がない場合である。

① 『藻汐草』	魯西亜東北辺ノ人(一四オ)	スチヤゲル	カラフト嶋の語之
『語箋』	ロシヤ東北辺の人(七ウ)	スチヤゲル	唐太島の語
② 『藻汐草』	鹿の如き異獣(五一オ)	ツナカイ	カラフト嶋
『語箋』	鹿のごときけもの(二七オ)	ツナカイ	カラフト
③ 『藻汐草』	蝙蝠の如く大なる(五一ウ)	アツポ	メナシ山中
『語箋』	蝙蝠の如く大なるもの(二七ウ)	アツポ	メナシ山中
④ 『藻汐草』	うくひの如くにて(五三オ)	ツツポ	ソウヤ
『語箋』	うぐひのごときうを(二八オ)	イトンカ	カラフト
		ツツポ	ソウヤ
		イトンカ	カラフト

(6) 「エ」の表記

『藻汐草』では、エの表記例は認められないが、『語箋』では次の一例が認められる。

『藻汐草』

あざみ (六六ウ)

ウエイムニ

薊 (三三オ)

ウエイムニ

『語箋』

(7) 傍線の有無

『藻汐草』と『語箋』の分類毎の傍線の付されたアイヌ語の数は次のとおりである。

	『藻汐草』	『語箋』
天地	一	〇
人物	一	〇
支体	一	〇
世事	一〇	〇
口鼻耳目心	〇	〇
器財	一〇	二
鳥獸	一七	一〇
草木	一八	六
品目	九	七
助辞	一	一
計	六八	二六

傍線が付されたアイヌ語は、『藻汐草』では、促音や拗音等を表しているが、『語箋』では、次のような場合で、これも統

一はとれていない。

『藻汐草』

脊骨 (一五ウ) イツケウ

りきむ (二三オ) ニウエン

柄杓 (四五オ) カツクミ

椀皮の柄杓 (四九ウ) タツカツクミ

魚の白子 (五四オ) ウフ

鱸れ (五四オ) モキラツプ

山鳩 (五八ウ) ツヅツテ

附子 (六四ウ) セタシユルク

鳥頭 (六四ウ) シヨノシユルク

餅 (六九オ) シツト

渴く (七〇ウ) クツトム

二十 (七二ウ) ホツ

狭い (七四オ) フツツ子

『語箋』

脊骨 (八ウ) イツケウ

りきむ (一二ウ) ニウエン

柄杓 (二四ウ) カツクミ

椀皮の柄杓 (二六ウ) タツカツクミ

魚の白子 (二八ウ) ウフ

鱸 (二八ウ) モキラツプ

山鳩 (三〇オ) ツヅツテ

附子 (三二ウ) セタシユルク

鳥頭 (三二ウ) シヨノシユルク

餅 (三四オ) シツト

渴く (三四ウ) クツトム

二十 (三七オ) ホツ

狭ひ (三五ウ) フツツ子

6. まとめ

本稿では、金田一の記述に基づき、主に『蝦夷語箋』の表記についてその概略を述べた。金田一が指摘するように、当時

の時代背景から出版されたと考えられるが、採録（省略）の基準、語形の違い等、不明な点が多い。また、同時期に出版された『英語箋』『蛮語箋』等との検証も必要と考える。今後の課題としたい。

注

- (1) 金田一京助「蝦夷語学鼻祖上原熊次郎先生逸事 二 蝦夷語箋」「アイヌの研究」一九二五（大正一四）年 内外書房。なお、『金田一博士喜寿記念アイヌ語研究 金田一京助選集I』昭和三五年 三省堂、及び『金田一京助全集 第六卷 アイヌ語II』一九九三年 三省堂、に再録（再録にあたって、「蝦夷語学の鼻祖上原熊次郎とそ（其）の著述」と改題されている）。
本稿では、『アイヌの研究』から引用した（再録にあたって、誤植と思われる箇所が数カ所見うけられる）が、旧仮名遣い、旧漢字は現在の形に改めた。
(2) 嘉永七年版にも、違いがあるようである。
東京大学・南葵文庫本（北海道大学附属図書館複写版）では、「蝦夷語箋」の後に「附録魯西亜言語」が来る。また、静嘉堂文庫本（マイクロフィルム版）では、内題がない。
(3) 金田一京助「蝦夷語学鼻祖上原熊次郎先生逸事 一 藻汐草」「アイヌの研究」一九二五（大正一四）年 内外書房。
(4) 田中聖子、佐々木利和「近世アイヌ語資料について——とくに『もしほ草』をめくって」『松前藩と松前』二四 一九八五年 松前町史編集室。
(5) 本稿では、『藻汐草』一九七二年 国書刊行会 を使用した。
(6) 『藻汐草』では同じ見出し語のものがあるが、独立している場合は、一語と数えた。
(例)「鮫」は、『藻汐草』の五三才と五三ウにある。
「干鮭」は、『藻汐草』の五四ウにある。
『語箋』では、『藻汐草』の子見出しを独立した見出し語として立てている場合がある。一語と数えた。
(例)『藻汐草』 獵虎（五二才） ラッコ ▲ホブシユツベ

	▲又マツイベ	牡	ピン子ツプ
		牝	マツ子ツプ
		子	アヅウ ツルツ
		子	ラツプ
		子	マトイベ
		子	ホブシユツベ
『語箋』	獵虎（二八才）	ラッコ	ホブシユツベ
			又マツイベ
	同牡	ピン子ツプ	
	牝	マツ子ツプ	
	同子	アヅウ	ラツフ
		ポシユツテ	マツイベ
		ツルツ	

- (7) 田中聖子「アイヌ語の仮名表記の変遷」『大野晋先生古稀記念論文集 日本研究——言語と伝承』一九九〇年 角川書店。
拙稿「嘉永七年のアイヌ語——特に『蝦夷紀行』について」『二松学舎大学東洋学研究所集刊』第三四集 二〇〇四年 二松学舎大学東洋学研究所。
- (8) 『改正蛮語箋』(嘉永三年 木寿堂)では、分類は「天文・地理・時令・人倫・身体・疾病・官室・衣飾・飲食・器財・金石・鳥獸・魚虫・草木・数量・言語・地名」の一七に分かれている。「天^シ 辺^ヘへめる」^{メル}、「日^ヒ ぞん^ソ」のように、見出し語に振り仮名、蛮語(阿蘭陀語)に読み(振り仮名)が付されており、
蝦夷語箋と同じ形式である。